文化財見学シリーズ48　　姫路市教育委員会文化部文化課（平成14年３月１日発行）

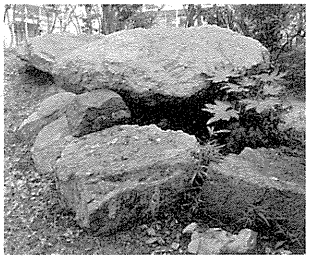
『妻鹿地区』をたずねて

妻鹿地区は、市川河口にできた三角州を中心に集落が発達しているが、北の甲山に旧石器や弥生時代の遺物が発見され、姫路市立飾磨高等学校周辺の平地からも弥生土器や石器が出土していることから、北部に高地性集落や山麓に小集落が存在していた可能性がある。さらに甲山から東の御旅山へかけて多くの古墳が発掘され、早くからこの地に人々が生活を営んでいた。

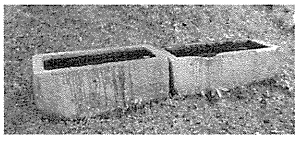
「妻鹿」の名について、神功皇后あるいは仁徳天皇のときに雌雄の鹿が現れ、雄鹿は家島諸島の男鹿に渡り、雌鹿は当地にとどまったことから妻鹿とよぶようになったという話が伝わっているが、古文書からは『松原神社文書』の正応２年（1289）に「三野南条内目賀津」とあるのが初見で、中世から松原八幡神社との関係が深かった。

江戸中期ころから幕末にかけて次第に新田開発が進んで農業も進展したが、漁業も大切な生業であった。とくに、大正５年に「妻鹿魚市場」が創設され、播磨やその周辺にまでも販路が拡大した。しかし、昭和35年に姫路市中央卸売市場が開設され、妻鹿沖の埋め立て工事が始まった。この年出光興産兵庫製油所が建設を開始し、翌36年に関西電力姫路第二発電所が妻鹿地先に建設を開始した。妻鹿漁港も昭和57年に埋め立てを完了し、当地区は大きく変容している。

◀大正末期の魚市場



御旅山９号墳▶



石棺身▶
（飾磨高等学校中庭）

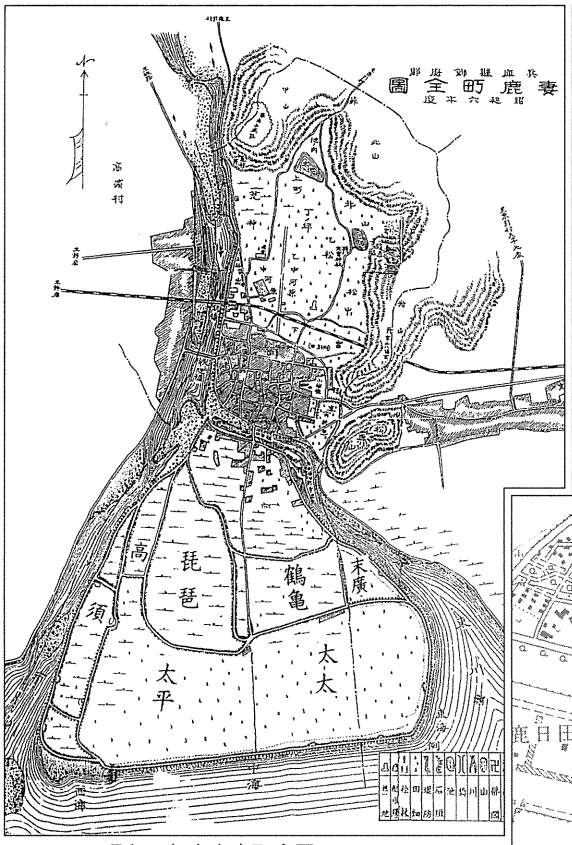
御旅山古墳群　通称御旅山は南から宮山・法蓮山・北山という。この御旅山を中心に４世紀から６世紀の古墳が一応14基確認されていた。しかし、造成地や関西電力送電用鉄塔の建設などで消滅したり、現存しても位置のわかりにくいものが多い。飾磨高等学校中庭にある９号墳は封土が流失して露出した横穴式石室がみられる。その側に２個の石棺身があるが、他の破壊された古墳に納められていたものらしい。御旅山ハイキングコースの北山登り口付近の道路を塞ぐようにして巨石が露出している４号墳は確認できる。３号墳は、割竹型木棺のあとが発掘され、三角縁三神三獣鏡やガラス玉・鉄剣・刀子・銅鏃・鉄鏃などが出土した。この３号出土遺物は市指定文化財。

宮山経塚　昭和23年（1948）に宮山の一本松の根本から発見され、経筒や古銭・鏡などが出土し、御旅山１号墳発見の端緒となった。この経塚の遺物は妻鹿資料館に保管。

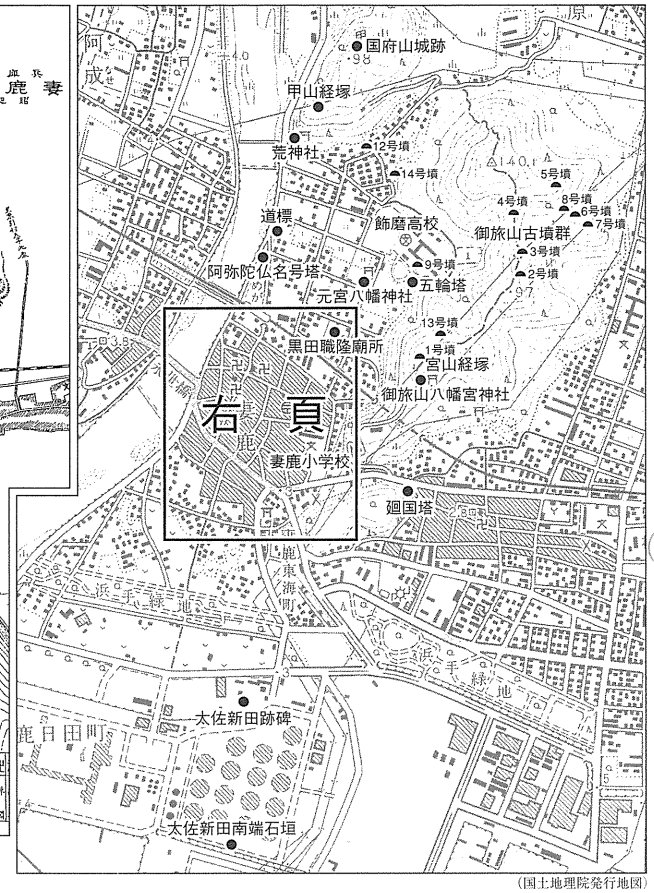
甲山経塚　昭和42年（1967）に発見され、経筒・須恵壺・鏡などが出土。

甲山経塚出土品

宮山経塚出土品



昭和６年度妻鹿町全図（文字一部拡大）
（宮田康彦氏文書）



（国土地理院発行地図）

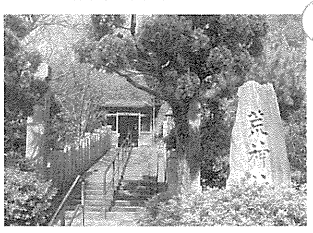
国府山城跡　標高98mの甲山（荒神山・功山）にあって、袴垂城・功山城・妻鹿城などの別称がある。『太平記』にみえる播磨国住人妻鹿孫三郎長宗が国府山城主であるとする文献の一つ『赤松家播備作城記』（元禄年中か）に、「本名岩氏薩摩守源氏長ノ末孫也、初為居城也」とあり、その後赤松貞村の二男貞祐が居城したと記している。天正８年(1580)羽柴秀吉に姫路城を渡した黒田官兵衛孝高は父職隆とともに国府山城に移り住んだ。城の規模等について、『飾磨郡誌』に、長さ95間、横11間、山頂に城の辻・一の段・二の段などの記載があるが、明らかでない。山麓にある「妻鹿城址」の碑は昭和45年の建立。

荒神社　奥津彦命・奥津姫命を祭る。この荒神は、竈の神さんのほかに子どもの百日咳や喘息に御利益のある神といわれる。拝殿に「オコゼ」の絵馬が奉納されているのがめずらしい。手水鉢は石棺蓋。

道標　市川土手にある。明治45年(1912)に建てられたもので、「右おくやま・ごちゃく」、「左こうじん」と刻まれている。ここは旧妻鹿村のはずれで、字「出口」といい、奥山・御着に通じる。近くに市川の渡しもあった。

阿弥陀仏名号塔　妻鹿墓地内にある。正徳２年(1712)に妻鹿村惣中によって建立されたもので、正面に「南無阿弥陀仏」とあり、左面に「三界万霊六親眷属」とある。

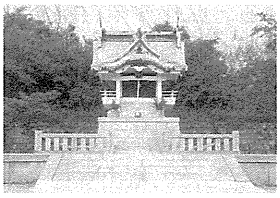
国府山城跡（御旅山より望む）


荒神社

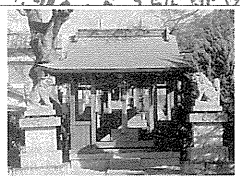
市川土手の道標

阿弥陀仏名号塔

御旅山八幡神社　松原八幡神社の御旅所。御旅山ハイキングコースの入口に位置する。天平宝字７年(763) 創建と伝える松原八幡神社記によると、目賀(妻鹿)の漁人久津理が海中より拾い上げた八幡大菩薩と書かれた紫壇の霊木を目賀川の末にある大石の上に安置し、のち目賀の北山に仮殿を造って神体を遷し祀ったとある。年代は不詳だが、一度山下に遷り、元禄７年(1694)にもとの山上に遷ったという記録がある。灘のけんか祭りに、ここでゴイナ落としの神事などを行うが、３基の神輿のからみ合わせや、旧７か村の屋台の練り合いは豪壮華麗である。社殿前に石棺がある。

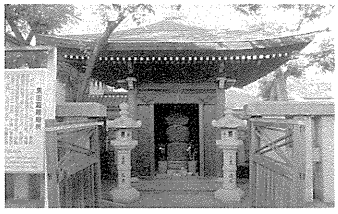

御旅山八幡神社

元宮八幡神社　妻鹿の氏神。祭神は応神天皇。宮山の御旅山八幡神社がいつの頃か山下に遷され、寛永13年(1636)か元禄７年(1694)に山上へ遷し祀られたという口伝や旧記があり、山上に引移るまで御旅山八幡神社の元宮であったとされる。昭和54年修復。玉垣などに三十八銀行妻鹿支店や力士のしこ名がみられる。



元宮八幡神社と正面の玉垣

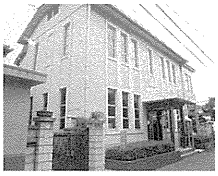
黒田職隆(もとたか)廟所　地元で「チクゼンさん」と呼ばれている凝灰岩製の五輪塔。正面に「満誉宗圓大禅定門　天正十三酉八月廿二日」、地輪左側に「黒田□□」の銘があったとの報告があり、黒田官兵衛孝高の父職隆の墓塔と考えられている。廟所は昭和52年妻鹿自治会が新築。


黒田職隆廟所

多田家と五輪塔　大庄屋を勤めたこともある多田家は代々茶道を究め、姫路藩侯にも仕えた。飾磨高校南に多田家の墓地があり、中央に黒田職隆廟所の五輪塔に似た古い五輪塔がある。誰の墓石か不詳。

五輪塔

旧妻鹿村役場跡　妻鹿は明治22年(1889) ４月の市制町村制施行により飾東郡妻鹿村となり、ここに役場が置かれた。昭和２年(1927)飾磨郡妻鹿町役場、同13年飾磨町妻鹿出張所、同15年飾磨市妻鹿出張所となった。昭和21年姫路市に合併後、姫路市飾磨支所妻鹿出張所、姫路市妻鹿連絡所となり、61年に姫路市妻鹿サービスセンターとなる。内部は一部であるが今も昔の面影を残している。


旧妻鹿村役場跡

西楽寺　真宗大谷派。寺伝によると、戦国時代、妻鹿氏をたよって当地に来た赤松一族の某なるものが天台宗の一宇を創建して書写山円教寺に属していたという。のち真宗に改宗するが、その時期が不明なので、開基を寛永２年(1625)祐観としている。

西楽寺

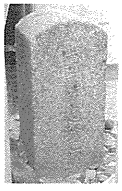
龍泉寺　真宗大谷派。永禄４年(1561)了順の開基。木仏を受けて寺号を公称したのは寛永11年(1634)法喚のときという。

龍泉寺

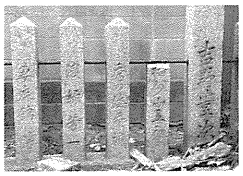
神宮寺　松原八正寺に属した真言宗の一院で、本尊は千手観音。通称「観音さん」。文政４年(1821)の石灯篭がある。西側に子授けの神、安産の神として信仰されている「塩がまさん」がおもしろい。昭和33年に本堂横手の手洗い鉢の台石になっていたのを発見して安置。

神宮寺

妻鹿村道路元標　神宮寺の前にある。路線の起点・終点・経過地を示す標識で、大正９年(1920)兵庫県告示によって設置された。


妻鹿村道路元標

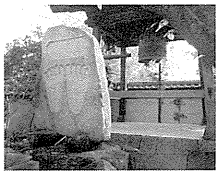
榎大明神　由来は不詳。大きな榎木から名づけられた。玉垣に、「一の浜一六」「妻鹿錦勝」「秀の海秀雄」といった多くの力士の名がみえ、当地域の相撲が盛んな様子をみることができる。


榎大明神と力士名のある玉垣

妻鹿の固寧倉　文化6年(1809)の社倉法によってつくられた義倉の一種。米麦などを蓄えて不時の災害に備えた。妻入りの土蔵で「固寧倉」の扁額が架けられている。弘化3年(1846)には姫路藩内に288か所も設置された。今は当所と東山・白浜・野里・刀出の5か所に残るのみである。市指定文化財。

固寧倉

教念寺　天文3年(1534)の創建で道宗の開基。寛文10年(1670)円喜のときに木仏を受けて寺号を公称した。亀山本徳寺の末寺。貞享3年(1686)の梵鐘がある。昭和4年の銘がある仏足石は足の長さ約65㎝、両足に輪相などを施刻した本格的なもので、当寺の秦謙譲師がインドで模写し、篤志者によって造立された。


教念寺の仏足石と梵鐘

旧勝間家住宅(現清野国寛家宅)　勝間家は網元・廻船問屋として千石船を2艇もち、五島列島などへも西播の物産を運んだ。元禄13年(1700)の銘がある鬼瓦から主屋もこの時代に近い建物と考えられる同家は昭和初期まで栄え、終戦後龍野市に移住。

旧勝間家住宅

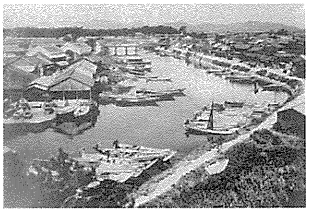
金比羅さん　お社はなく、参献灯とある文化6年(1809)の常夜灯を祀り、海上の安全を祈願した。妻鹿漁港の「目印」ともなった。すぐ左側に薬力稲荷神社がある。

金比羅さん

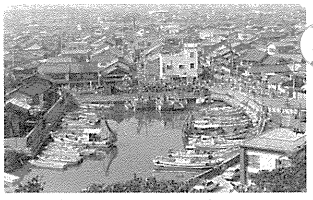
御幸岩神社

御幸岩神社　住吉神社の名でしられるが、公には御幸岩神社。明治44年に本殿と拝殿を建立。神功皇后が岩の上に立って、水路を眺めたという伝説から、神社前の海中にあって干潮時に露出する岩を御幸岩とよんだ。今は埋め立てられ、その一部が東海公園にある。

妻鹿漁港　河川漁港。村内を市川の支流(住吉川・前川・東川ともいう)が流れ、現在の東海町が漁港であった。漁港は昭和57年に埋め立てが完了し、東南の白浜町の地先に移った。

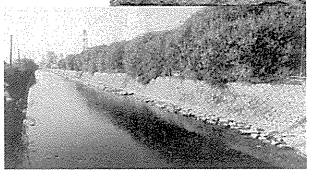

大正初期の妻鹿港
妻鹿魚市場・前川・住吉橋

魚市場跡　大正5年(1916)川原の寄州一帯を埋め立てて「妻鹿魚市場」を創設した。大正12年の神戸姫路電気鉄道（山陽電鉄の前身）開通や自動車の普及によって各問屋は倉庫を作って魚を大量に仕入れ、販路を播州一円や但馬方面にまで広げた。第2次世界大戦時に物価統制がしかれて停滞したが、戦後妻鹿魚市場は復活した。昭和35年に姫路市中央卸売市場が開設され、昭和44年頃魚市場は取り払われた。


妻鹿港と祭りの屋台（昭和50）

太佐新田　太平(たいへい)新田と太太新田の総称を太佐新田とよんだ。明治44年の『妻鹿郷土史』によると、太物屋山本佐兵衛と平福屋井上弥太郎が藩の許可を得て天保9年(1838)に起工し、約10年かかって開発した所を太平新田といい、佐兵衛の子佐一郎が嘉永年間(1848～54)に起工し、安政5年(1858)に竣工した所を太太新田という。新田は、昭和37年に出光興産によって買収され、今は、記念碑と新田南端にあたる堤防の石垣の一部にその痕跡を残すのみである。

太佐新田の跡碑


太佐新田南端の石垣

■編集　出口隆一（姫路市文化財嘱託調査員）